

自分の全力を使って動くのは何と気持ちのよい事だろう。それが鬼ごっこでもブランコでもスキップでも、そして大げんかであっても、その時の子供達は皆よい顔をしている。息をはずませて……という機会がもうほとんどなくなってしまった大人達も、よい顔をしている子供の姿から自分達の幼なかつた日々を思い浮かべることが出来る。

セーターがいるようになってきてから、なぜか子供達の中ですもうがはやってきた。

すもうはいやおうなしに全力を出さなければならない動きである。かけっこではかなわなかつた子供や、一步出遅れていた子供も、すもうを通じて思わず出ってしまった自分の力に驚いている光景がよく見られ、はた目にも、気持ちのよいものである。

〔短日断章〕

最初はそれぞれ同じ位の子同志でとっているが、大体皆の強さがわかってくると、そのうち自分より強い者を相手にではな

す も う

く、弱い者を相手にやろうとする傾向が生まれる。これは、前向きな自信というよりむしろ、守りの自信というべきもので、一般には歓迎されないかもしれないが、このことから、子供達がいかに体を動かすことに自信を持つようとしていくかわかる気がする。そうなってくるとその子が自分より弱いと思っている者に対して「やろうよ」と誘いかけ、挑戦された子が、「いやだよ」と答えるパターンが生まれ、誰の挑戦を受けるかによってその子の自信を押し計ることが出来る。この「自信」とは何かと考えてみると非常に興味深い事が思い浮かぶ。少々逆説的になるが、その自信とは負けてもよいという自信ともいえるのではないだろうか。人間誰でも、大人になっても負けるのは好きでない。しかしたとえ負けた時にも自分の負けを笑えるゆとり（自信）がなければ勝負は常に勝つか、又はやらないかのどちらしかありえない。

子供の気持ちがあるのよう
に動く時、私は彼らにとっ
て重宝な存在になる。なぜ
なら教師（大人）に負けて
も当たりまえという気持ち
が子供達には一方にあり、
又時々教師は負けてもくれ
るからである。従って、自
信のない子供ほど、私とすもうをとりたがり、仲間の中で
自分の力を出しきっていない子供は、私としかとらない。
これは表面的にみれば、子供が子供同志で遊べていない状
態であり、教師に遊んでもらっている状態であるかもしれ
ない。しかし私はたとえそうであったとしても一向にかま
わないと思う。なぜなら第一にその子は少なくともすもう
から逃げてはいないし、寒い中で体を動かすことに面白さ
を感じており、さらに仲間と同じ遊びをするということ
で、友人との関係に対して気持ちが向かっていると私には
思えるからである。

実際子供達とのそんな日々が続くと、だんだん子供達は

豊田 一秀

ッとした空気の中で遊びたいものだ。決して部屋から追
出すのではなしに。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）



「おいトンタ（私のこと）、
本気でやるうよ」等と言
出すものであり、いつの日
か、私が彼らのすもうに入
れてもらえる日を楽しみに
しているのである。

冬の日には寒い。はく息も
白い。だからこそ外のピリ